

卸売市場流通における東北地域卸売市場の動向

高橋 太一

(東北農業試験場)

A Trend of Wholesale Market within Tohoku-area

Taichi TAKAHASHI

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

わが国の卸売市場流通は、青果物の流通が多様化する中で、現在も青果物流通の過半をしめており、青果物流通の中心的存在である。現在の卸売市場流通は、制度的に指定消費都市に設置された、中央卸売市場を中心として行われている。したがって青果物の流通を研究するためには、中央卸売市場を対象とした分析が重要な役割を果たすことになる。卸売市場では、流通条件の変化に対応しながら業務が行われているので、常に近年の動向を分析していくことが必要である。しかしながら、中央卸売市場を対象とした研究は、特定の市場を実証的に分析したものが多く、全国的に各中央市場を共通の指標で比較したものは少ない。そこで、本論では、全国的なデータをもとに、近年(1980年以降)の中央卸売市場流通全体を主要野菜14品目について分析し、近年の卸売市場流通の特徴を明らかにする。それは、常に効率的な青果物流通の実現を求められる卸売市場流通について、評価の基礎的知見を提供することになる。

2 課題と方法

卸売市場流通分析において、藤島の「広域消費市場論」は代表的なものの一つである。そこで、藤島の分析に対応させて、1980年～93年までの全国の開設都市54ヶ所の中央卸売市場(以下「市場」と表記する)流通全体の動向とその中での東北地域卸売市場の特徴を分析する。広域消費市場論は、集荷の遠隔地化、集荷の広域化、周年集荷体制の強化、開設区域の消費量に比較した集荷規模の拡大等を広域消費市場化の論拠としてみるものである。本論では、これらの点について、1980・85・90・93年の4ヶ年のデータを分析し、80年代以降東北地域の市場が広域消費市場の性格を強めているかどうかを明らかにする。東北地域は、近年野菜の産地化が進展し、それに対応して地域内の中央卸売市場のあり方が変化していると予測される。このことは、東北の市場は全国的にみて、どのような性格の市場として立地しているかを明らかにすることにつながる。集計・計算には、54市場(93年時)について、80年・85年・90年・93年の各卸売市場年報から主要野菜14品目における月別の都道府県別入荷量と、各都道府県庁所在都市間の距離を各都道府県間の距離に代替して使用している。計算・集計は、すべて月単位、月平均にもとづくものである。

3 卸売市場流通の分析

(1) 入荷量

市場別に4ヶ年の集荷量の平均値は、東京1407千t、名古屋381千t、大阪351千tとなり三大都市圏が多くなっている。東北では、仙台が平均127千tで4ヶ年の集荷量順位が6～8位である。八戸、盛岡、福島の各市場は平均値56～52千tで20位台、青森、秋田、山形の各市場は42～40千tで30位台、いわきは31千tで40位台に位置している。一般的にみて、東北の市場は中位から下位にある。

(2) 遠隔地化

東北の各市場と各地域の大都市市場及び各地域ごとの輸送距離を、加重平均して集計した。93年の各地域平均の輸送距離は、北海道753km、九州508km、東北480km(秋田535km～山形435km)となり、北海道、九州、東北の輸送距離が長くなっている。一方で、80年～93年にかけての変化をみると、北海道91km減、東北14km増(いわき90km増～秋田42km減)に比較して、いわき以南以西の各地域では、九州183km増、東海159km増をはじめとして、輸送距離を大幅に伸ばしていることが確認できた。これは、80年以降の野菜産地が東北、北海道を中心に進展したことにより、北日本の産地からの集荷が増大した結果、東北では近距離産地であり輸送距離は増大しないが、東北以南以西の市場からは、遠隔産地となり輸送距離が増大したためと考えられる。

(3) 広域化

ここでは、各市場の月ごとの入荷量において1%以上のシェアをもつ産地(都道府県)数を集計し、その数の大きいものほど集荷の広域化が進んでいると捉える。この産地数は全国平均で13.63であるのに対して、地域平均でもっとも大きいのは近畿地域の5.90、各市場ごとでは大阪の7.98である。全国的にみると、あるシェアをもつ産地は13ヶ所以上あるが、特定の市場の取引先としては、最大で約8ヶ所ほどとなっている。東北地域は平均で4.53(秋田4.94～いわき3.83)であり、産地数の変化は東北平均で0.06とほとんど増えていない。東海から北陸以西の市場は、80年には産地数が東北に比較して少なかったが、93年までの間に産地数が増え、四国をのぞいて東北と同程度かそれ以上の数の取引産地を持つようになっている。

(4) 周年集荷

地域別・都市別の各中央卸売市場における周年集荷の変化を示したものが図1である。市場流通は全体的に、25%水準に近づいており、集荷量の平準化という形で周年化が進んでいることがわかる。地域別にみると、東北地域の市場は周年集荷の進展が遅くなっている。また、集荷量が多

くなるのは、各地域とも近郊産地での生産が多くなる時期であることが確認できた。東北地域の市場では、生産のピークに対応した集荷のピークが、関東以西の各地域の市場に比べてより鋭くなっている。このことは周年集荷という消費市場的性格より、産地市場的性格が強いことを示している。

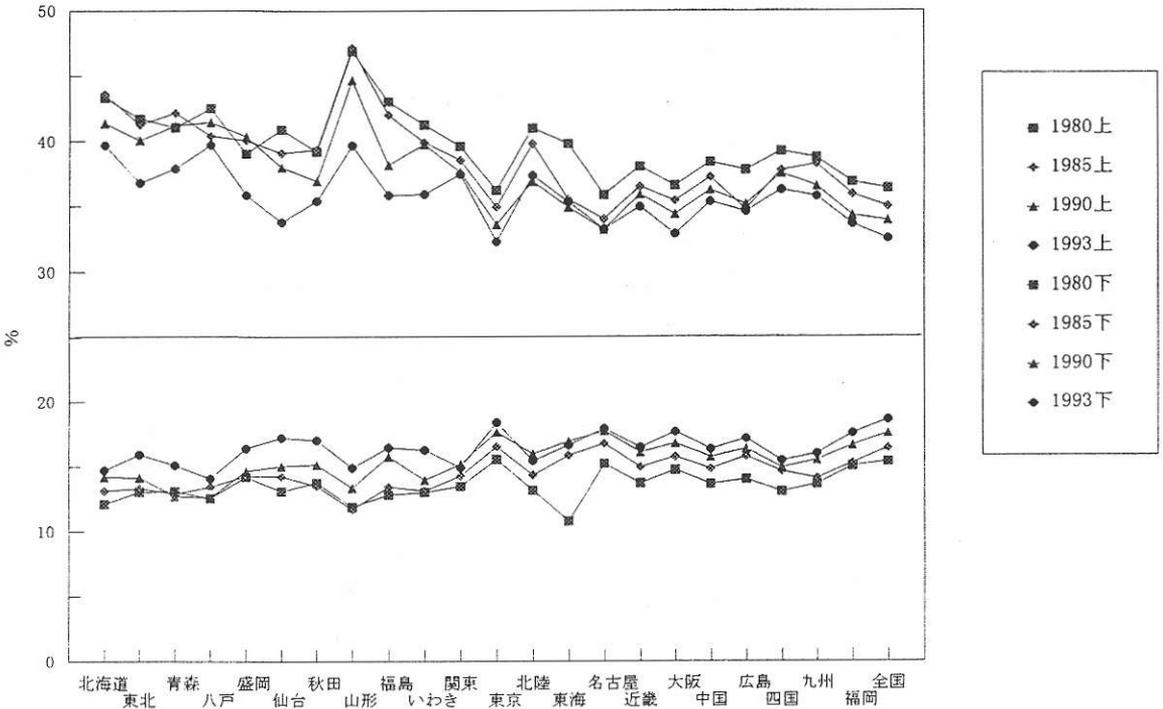


図1 地域別・都市別の各中央卸売市場における周年集荷の状況

- 注. 1) 各中央卸売市場年報, 1980・85・90・93年より作成。
- 2) 1980上とは, 1980年において入荷量の多い3ヶ月の割合。1980下は, 1980年の少ない月3ヶ月の割合。以下同様。
- 3) 25%の線に近づくほど, 周年集荷の平準化が進んでいる。
- 4) 関東は東京市場を除いた値。

(5) 集荷規模

本論では、各市場の集荷量を開設地域の推計消費量で割った値を、集荷規模として捉える。集荷規模は、全国平均では、80年2.17, 85年2.43, 90年2.77, 93年3.04となり、全体としては0.88の増加になる。その中で東北は3.07から5.06と1.99増加している。これは、東北地域で夏場に生産される野菜が、東北地域の市場に、開設地域の消費量を大幅に越えて、大量に入荷されるためであり、産地市場的性格の表れである。93年においても、大都市圏にあり消費市場の性格が強い東京は2.61, 大阪は3.16である。他方で大都市圏でありながら、近郊に野菜の大産地を持つ名古屋は5.15となっている。全国平均をかなり上回る市場は、産地市場的性格が強いことが示されている。

4 ま と め

東北地域の卸売市場については、①輸送距離自体は長いものの、80年以降輸送距離の伸びはあまり大きくない。②集荷元の産地数は80年段階でかなり大きくなっているが、その後の増加は少ない。③周年集荷は進展しているものの、西日本の市場と比較して平準化の度合いは小さい。④集荷規模については、かなり大きく増加している。これらのことをまとめると、80年以降は、70年代の動向として指摘された広域消費市場としての性格より、特定の近郊産地から特定の時期に大量の入荷を受ける、産地市場としての性格・機能をより強めていると判断される。